

【令和元年度】出前講座 テーマ：三田の歴史

日本の城・三田の城・九鬼の城

令和元年（2019）11月29日（金）三田市 文化スポーツ課

※本講座は、令和元年度さんだ生涯学習カレッジ大学教養講座にて、「戦国から江戸時代の九鬼氏」（令和元年11月1日・18日）と題して講演した内容です。

【はじめに】

三田藩主九鬼氏は、戦国時代には現在の三重県鳥羽市を拠点に活躍していた水軍を率いる武将大将でした。鳥羽から三田にやって来た九鬼氏の歴史について、最新の研究成果の一部を紹介します。

【九鬼氏について】

志摩国鳥羽 九鬼嘉隆（大隅守）：天正6年（1578）？～慶長2年（1597）

九鬼水軍として活躍

守隆（長門守）：慶長2年（1597）～慶長5年（1600）

慶長5年（1600）～ 伊勢2万5千石加増

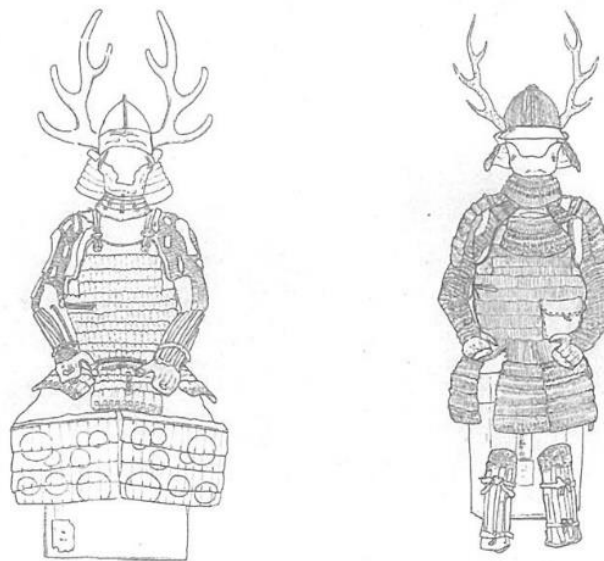
寛永5年（1628）守隆没後、家督争い

九鬼久隆（守隆四男（五男とも））三田へ

隆季（守隆三男）丹波綾部へ

十三代 九鬼隆義（たかよし）（在 1859～71）

綾部九鬼氏三男、藩政改革、版籍奉還、
三田藩知事、明治6年神戸転居



藩主家伝来嘉隆公（左）、守隆公（右）甲冑

【鳥羽城の歴史】

水軍大将 九鬼氏（伝承のなか、不明点多い）

永禄8年（1565）志摩地頭連合の攻勢、九鬼嘉隆、三河に逃げる

このころ織田信長に近づく

永禄10年（1567）鳥羽の領主橘氏と姻戚。鳥羽湾で水軍力強化。

元亀元年（1570）志摩地頭連合をほぼ平定。

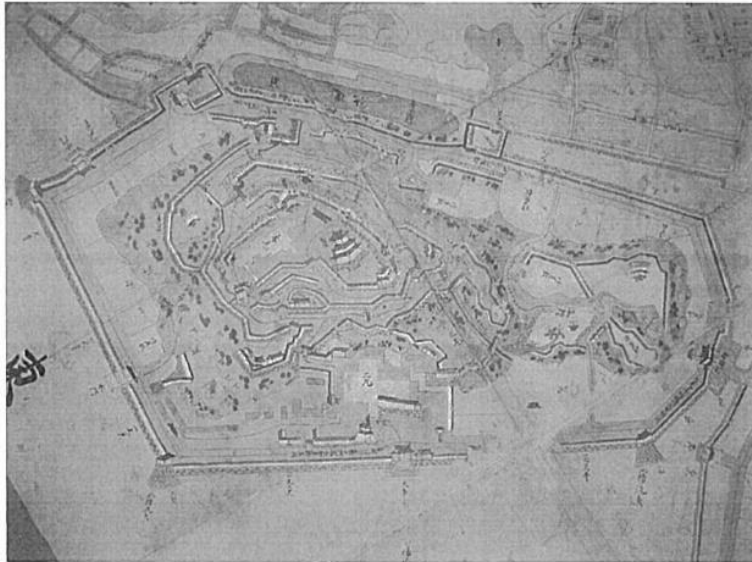
天正7年（1579）志摩国を領（3万5千石）、大隅守任官

天正10年（1582）嘉隆、九鬼惣領を篡奪

天正14年（1586）鳥羽城築城に着手

文禄3年（1594）鳥羽城完成

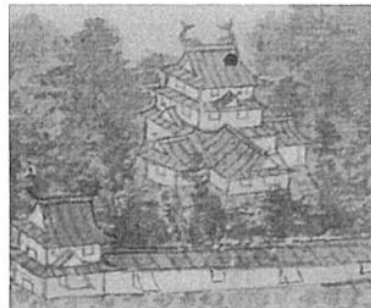
寛永10年（1633）九鬼氏二分、三田藩と綾部藩へ転封



其の一



其の二



其の三

鳥羽城古絵図

【三田城の歴史】

—海から上がった水軍大将が 250 年の思案をめぐらした山の陣屋—

織田・豊臣の水軍大将を務めた九鬼氏。江戸時代のお家騒動を機に山国の三田に。海から上がった「山の九鬼氏」は、城の傍らの陣屋で再び勇躍する日々を夢見た。

有馬氏が築いた三田城

三田陣屋の前身は、平山城の三田城であった。室町時代の応永年間ころに赤松円心の孫、義祐が館を築いたことに始まり、車瀬城とも呼ばれた。以後、有馬郡にちなみ代々有馬を名乗った。有馬氏は將軍の側近として活躍し、嘉吉の乱で赤松本家が没落した際も命脈をつないだが、天正初年、信長配下の荒木村重の計略にかかり滅ぶ。城には荒木重賢が入り、今に残る城下の三筋の通りなどの整備をした。村重が信長に反旗を翻すと、「御敵さんだの城」（『信長公記』）として、羽柴・明智等の連合軍に囲まれた。重賢は秀吉に下り、播磨攻めで軍功をあげて木下の姓を授かり豊臣大名となった。

阪神北地区で唯一の近世城下町

本能寺の変の後、三田城には山崎氏が二代にわたり三田城にあり、秀吉の有馬湯山御殿、京都大仏殿造営等に携わった。秀吉の没後、諸国の大名が帰趨を決めかねていた時、山崎家盛は大坂方につく予定であったが、池田輝政の妹であった室の天球院に組み敷かれて翻意、徳川家康の娘と孫であった義兄輝政の奥方と子息を表向きは大坂方ということにし、有馬での温泉治療を口実に救出に成功。内助の功により関ヶ原を乗り切った（「池田履歴略記」）。

戦いの後、三田城には有馬則頼が入るが翌年に没し、息子の福知山城主豊氏の支配となった。1615 年（元和元）の一国一城令により廃城となり、資材は福知山へ運ばれた。

九鬼氏の陣屋へ

有馬豊氏が九州久留米に移ると、三田は天領となり代官が置かれた。1626 年（寛永 3）松平重直が入り、1633 年（寛永 10）に水軍の将九鬼久隆がお家騒動を機に志摩国鳥羽城から移ってくる。九鬼氏は城主から格下げとなり三田城に入れず、松平氏の居館に入り陣屋とした。治世は安定し 10 代隆国の時に城主格並に上昇する等、13 代にわたって三田を治め明治維新を迎えた。

最後の藩主義隆は、郷土出身の蘭学者川本幸民をはじめ人材の登用を進め、維新後は福沢諭吉のすすめもあって、他藩に先駆けて領地返上を進言、藩をあげて開港地神戸に進出。西洋の品物を扱う商社を創業し、開港地周辺の土地開発に着手する等、現代の神戸の基礎を築いた。



三田小学校蔵『摂州三田絵図』より

1：最後の三田藩主九鬼隆義

サムライの社会から近代の日本へと大きく時代が激動した幕末の、三田藩主九鬼隆義は、傾いた藩政を立て直すために積極的に人材を登用し、改革を進めました。

○九鬼隆義（最後の藩主）（1837－1891）



改革と進取の気風、開明藩主。
人材を登用し藩政改革。西洋化を図る。
キリスト教に入信。
神戸で白洲、小寺等と事業展開。
福沢諭吉と交流、事業家としても成功。

九鬼隆義肖像写真（三田市蔵）

三田の近代化に影響を与えた明治の群像

○蘭学者川本幸民（1810－1871）：「化学」の草分け。旧幕府蕃書調所教授。

幕末に日本にもたらされた西洋技術を解釈、手持ちの素材、技術で実践する。「日本人でもできる」、やる気を見出す。
緒方洪庵の友。旧三田藩士の知的・精神的なプレーン
洪庵を通じ福沢諭吉と親交。三田藩主に福沢諭吉を紹介。
三田に帰郷後は「英蘭塾」を開設、旧三田の子弟教育。
著書『気海観瀾広義』、『遠西奇器述』、等

○九鬼隆範（1835－1908）：明治政府初期の鉄道技師。三田藩士越賀家より家老九鬼家に入る。

銀座煉瓦街、新橋－横浜、京都－神戸、東京－高崎をはじめとする鉄道敷設地等の測量事業に従事。測量入門書『測地必携』、擬洋風建築旧九鬼家住宅（県指定文化財）、等

○福澤諭吉（1834—1901）：思想家、教育者。

中津藩（現：大分県中津市）出身。「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらずといえり」で有名な『学問のすすめ』や『西洋事情』等の著作で知られる明治の思想家。「実学」、「実業」を重んじ、生涯官途には就かなかった。慶応義塾の創始者。

蘭学者川本幸民を通じて藩主九鬼隆義、旧三田藩士と親交。維新後の隆義や旧三田藩士の活動に大きな影響を与えた。隆義の維新後の進路への問いに、「これからは実業で生きるべきでは」と助言。旧藩主の隆義以下、主だった旧三田藩士の開港直後での神戸での活躍のきっかけとなった。

「白洲先生が旧三田藩に仕えて藩主の明亦能く之に任じ、主従水魚の信親を以て藩政を整理して藩庫を富ましたるは世に隠れもなき事実にして」（福澤諭吉『牡丹正宗』と題する雑報『福澤諭吉全集』第20巻）

「一身の独立一家に及び、一家の独立一国に及び、始めて我が日本も独立の勢いを成し」（福澤諭吉「(明治3年)正月22日付九鬼隆義宛書簡」)

「今此の貧民を救わんの策は、金を与るよりも、知恵を附与する方が然るべく奉り存じ候。人に知恵を附るには、まず自から知識（見聞）を研くに若かず。知識を研き、見聞を博くするには、書を読むを専一とす」（福澤諭吉「(明治3年)2月15日付九鬼隆義宛書簡」『福澤諭吉書簡集』）

○新島 襄（1843—1890）：同志社英学校の創設者。宗教者、教育者。

安中藩（現：群馬県安中市）出身。アメリカで神学と理学を修め宣教師となる。新島は神戸や京都を中心に活動。明治8年（1875）同志社英学校（現同志社）を設立。

明治10年（1877）摂津第三番目の教会が三田町に設立されるにおよび、その献堂式の司会のため三田に来訪。

○元良（杉田）勇次郎（1858—1912）：日本初の心理学者。

英蘭塾出身。明治初年、三田に来たデービス師の説教に感動し、キリスト教入信。同志社の初期入学者のひとり。

アメリカ、ボストン大学、ジョン・ポプキンス大（小寺健吉と同窓）にて心理学を学ぶ。帰国後は帝国大学の心理学講座を創設。